

青衣童女像

寺田寅彦

青空文庫

木枯らしの夜おそく 神保町じんぱうちょう を歩いていたら、版画と額縁を並べた露店の片すみに立てかけた一枚の 彩色石版クロモリソグラフ が目についた。青衣の西洋少女が合掌して上目に聖母像を見守る半身像である。これを見ると同時に古いなつかしい記憶が一時に火をつけたようによみがえつて来た。木枯らしにまたたく街路の彩燈の錦にしき の中にさまざまの幻影が浮かびまた消えるような気がするのであつた。

十四五歳のころであつたかと思う。そのころ田舎いなか では珍しかつた舶来の彩色石版の美しさにひどく心酔したものであつた。われわれはそれを「油絵」と呼んでいたが、ほんとの油絵というものはもちろんまだ見た事がなかつたのである。この版画の油絵はたしかに一つの天啓、未知の世界から使者として一人の田舎少年いなかしようねん の柴の戸しば ぼそにおどされたようなものであつたらしい。

当時は町の夜店に「のぞきからくり」がまだ幅をきかせていた時代である。小栗判官おぐりはんかん 、頼光の大江山鬼退治、阿波の鳴戸、三莊太夫の鋸引き、そういつたようなもののが陰惨にグロテスクな映画がおびえた空想の闇に浮き上がり、しゃがれ声をふりしぶるからくり師の歌がカンテラのすすとともに乱れ合つていたころの話である。そうして東京

みやげの「江戸絵」を染めたアニリン色素のなまなましい彩色がまだ柔らかい網膜を残忍にいただらせていたころの事である。こういうものに比べて見たときに、このいわゆる「油絵」の温雅で明媚な色彩はたしかに驚くべき発見であり啓示でなければならなかつた。遠い美しい夢の天国が夕ばえの雲のかなたからさし招いているようなものであつた。

当時の自分のこの「油絵」の貧しいコレクションの中には「シヨンの古城」があつた。

それからたしかルツエルンかチユーリヒ湖畔の風景もあつた。スイスの湖水と氷河の幻はそれから約二十年の間自分につきまとつていた。そうしてとうとう身親しくその地をおとずれる日が來たのであつたが、その時からまたさらに二十年を隔てた今の自分には、この油絵のスイスと、現実に体験したスイスとの間の差別の障壁はおおかた取り扱われてしまつて、かえつて二十年前の現実が四十年前の幻像の中に溶け込むようにも思われるのである。

ナポリの湾内にイタリアの艦隊の並んだ絵も一枚あつた。背景にはヴェスヴィオが紅の炎を吐き、前景の崖^{がけ}の上にはイタリア笠^{かさまつ}松^{まつ}が羽をのしていた。一九一〇年の元旦^{がんたん}にこの火山に登つて湾を見おろした時には、やはりこの絵が眼前の実景の上に投射され、また同時に鷗^{おう}外^{がい}の「即興詩人」の場面がまざまざと映写されたのであつた。

静物が一枚あつた。テーブルの上に酒びん、葡萄酒ぶどうしゅのはいつたコップ、半分皮をむいたみかん、そんなものが並んでいた。そしてそれはその後に目で見た現実のあらゆるびんやコップや果物くだものよりも美しいものであつた。すべてがほの暗いそうして底光りのする雰囲気ふんいきの中から浮き出した宝玉のようなものであつた。

そうしてそのほかに一枚青衣の少女の合掌した半身像があつた。これは両親と自分との居間の楣間に掲げられた今まで長い年月を経た。中学の同級生のうちで自分がこういう少女像の額なんか掛けているのをおかしいと言つて非難するものもあつた。十九の年に中学を出てから他郷に流寓りゅうぐうした。妻を迎えて東京をあつちこつちと移り住んだ。その間に年に一度ぐらい帰省するそのたびにこの少女像は昔のままに同じ楣間に同じ姿勢のままに合掌して聖母像を見守つていたのである。

父がなくなつてから郷里の家をたたんだ時にこれらの「油絵」がどうなつたか。不思議なことにはこれに関する自分の記憶が全く空白になつてゐる。事によると自分が家の始末に帰る前にもう取り片付けに着手していた母の手で何かといつしょに倉の中へしまい込まれて今でもどこかに自分の所有物として現存しているのか、それとも雑品の中に交じつてくず屋の手に渡つてしまつたのかもしれない。郷里の家は人に貸してあるので、たまたま

帰省しても、締め切つたままの座敷倉へはいる機会はまれである。のみならずこれらの絵の事は実際にもう長い間自分の識域の底深く沈んでいたのであつた。神田の夜店の木枯らしの中に認めたこの青衣少女の 一一重像ドッペルゲンガはこのほど消えてしまつていた記憶を一時に燃え上がらせた。少女は四十年前と同じ若々しさ、あどけなさをそのままに保存してエメラルド色のひとみを上げて壁間の聖母像に見入つているのである。着物の青も豊頬ほうきよの紅も昔よりもかえつて新鮮なように思われるのであつた。

ただ 一瞥いちべつを与えただけで自分は惰性的に神保町の停車場まで来てしまつた。この次に見つけたらあれを買って来るのだと想いついた時には、自分をのせた電車はもう水道橋すいどうばしを越えて霜夜の北の空に向かつて走つていた。昔のわが家の油絵はどうなつたか、それを聞き出す唯一の手がかりはもう六年前になくなつた母とともに郷里の久万山くまやまの墓所の赤土の中にうずもれてしまつてゐるのであつた。

その後おりおり神保町の夜店をひやかすようなときは、それとなく気をつけてゐるが、この青衣少女にはめぐり会わない。夏がやつて來た。夕方浴後の涼風を求めて神田の街路をそぞろ歩きするたびにはこの「初恋」の少女の姿を物色する五十四歳の自分を発見して微笑する。そうしてウエルズの短編「壁の扉とびら」の幻覚を思い出しながら、この次にいつい

かなる思いもかけぬ時と場所で再びこの童女像にめぐり会うであろうかという可能性を、さじの先でかき回しながら一杯の不二家のふじやコーヒーをするのである。

（昭和六年九月、雑味）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第三巻」 小宮豊隆[編]、岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年5月15日第1刷発行

1963（昭和38）年4月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年9月5日第64刷発行

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

青衣童女像

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>